

森田龜之輔

シモン・レネ、メナール、レネ、ブリュ。及び
エヴァル、ヴィア、ルの諸氏は其内の鋒々
たるものである。此人々は近頃のサロンで
最も多くを期待させる畫家で、彼はモネ。
シスレー、ビサロ等の跡を辿つて印象派畫
家が發見した新しい光の美を自家の幾籠に
收めてる上に彼の觀察は印象派のそれを嫌
に物の殻皮一尺光線を反射する部分だけ
の程度に止まらず、一層深刻に内部生命迄
に及んでる。彼の風景畫には色の絶妙な音
樂があるのみならず、其背後に温かき人生
の詩がある。つまりインチミズムの全體を
完全に代表した新しい大畫家である。

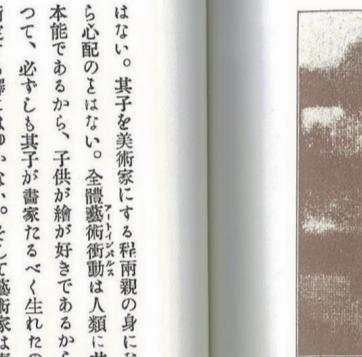
マダカスカルの東、赤道より南約二十度の
印度洋にモウリチウスといふ蕞爾たる佛領
の島がある。シダネエの父は佛國ブルタニア
の船乗りで故郷なるサンマロから此絕
海の孤島に移住し、千八百六十二年茲でシ
ダネエをもうけた。それでシダネエは十歳
位迄は聲嚇たる清聲を子守歌と聞いて眠り枝もた
わうに熟せる熱帶の果實、眩るきき程華やなる花
卉を玩具とし喜戯じゝ此の渺たる小島に生ひ立
つた。斯く壯大な又熱帶的絢爛な幼時の思ひ出を
有する彼が後年、北方の微光、雪後の寂寥、いて
たる小川などの解釋者となつたことは餘程面白い
矛盾ではある。

十歳に達した時兩親は歐洲に歸り、ドゥヴァア海峡

人の教師によつて管理されてゐた。家庭でいたづ
ら心配のことはない。全體藝術活動は人類に共通の
本能であるから、子供が繪が好きであるからと謂
つて、必ずしも其子が畫家たるべく生れたのだ
るや人類の要する最後の贅澤なる要求としてあ
る。故に藝術家は自分が社會に無頓着に製作した
ものが偶然に甚だ強きアートラクションを社會に與
へる場合に於いてのみ其勞力の報酬があるのだから
藝術は生活保護職業としては最も心細いもの
である。然るにシダネエの父は此例外であつた。彼は其子の畫家
たるんとする望みを抑壓しなかつた。これは彼れ
が其子の畫才を信ずると深く先見の明を有してゐ
たので然るか、或ひは彼も素人として可なり繪畫
彫刻の技能を有してをつたと謂へば、其子の嗜好
に同情を有して其望みを遂げしめたのが、よく少
さきシダネエの天賦の運命に適中したのか、孰れ
にもせよ此父は其子のスケッチに表はれたる畫才
の凡ならざるを觀て其研究を獎勵したので、シダ
ネエは、他の多くの畫家の場合と異つて、甚だ幸
福に順境にあつて勉強することが出来た。彼の始
めで這入つた學校はデュンケルクの美術學校で、當
時其學校はアントワーブ畫派の主義に固まつた一

アンリ・ル・シダネル「ジェルヴロワ、胸像」1902年、ひろしま美術館蔵

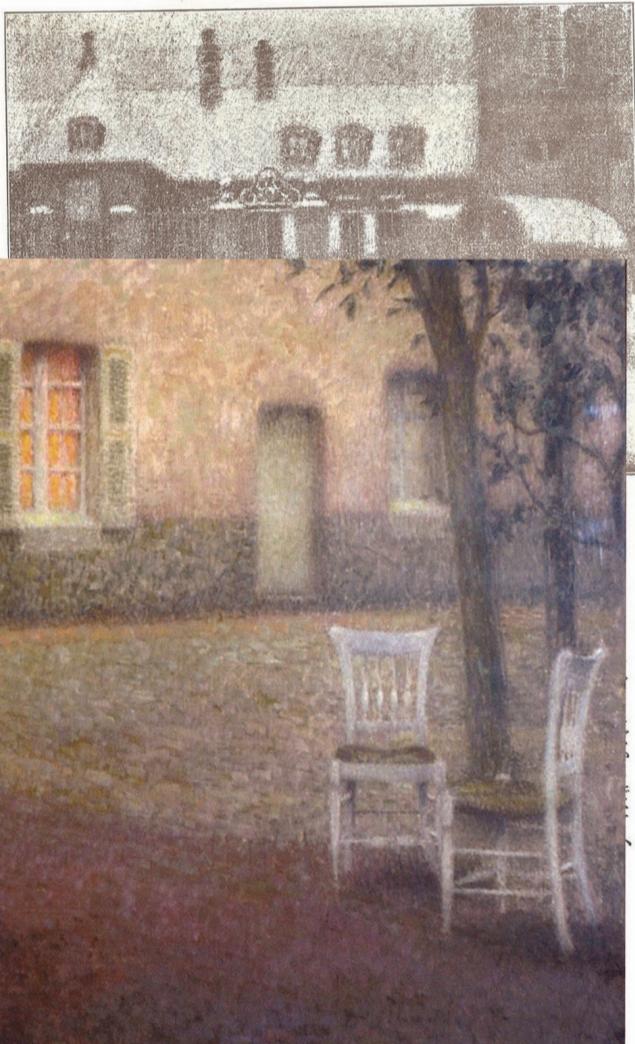
「美術新報」第10卷第11号（1911年）



筆エキダシ、ル・リンア 家に臨める



アンリ・ル・シダネル筆



アンリ・ル・シダネル筆

つたものゝ、唯それは愈々木
得たといふだけで、此學校の
語つた處に據れば一却つて守

(3)